第八講《小説２》人物相互のグループ分け〈選択肢問題〉

次の文章は、室生犀星（むろうさいせい）の小説『幼年時代』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

うしろの犀川（さいがわ）は水の美しい、東京の隅田川ほどの幅のある川であった。私はよく磧（かわら）へ出て行って、鮎（あゆ）釣りなどをしたものであった。毎年六月の若葉がやや暗みを帯び、山山の姿が草木の繁茂するにしたがってどことなく茫茫（ぼうぼう）として膨れてくるころ、近くの村落から胡瓜（きゅうり）売りのやってくるころには、小さな瀬や、砂利でひたした瀬がしらに、背中に黒いほくろのある若鮎（さあゆ）が上ってきた。

A 若鮎はあの秋の雁（かり）のように正しく、かわいげな行列をつくって上ってくるのが例になっていた。わずかな人声が水の上に落ちても、この敏感な（注）剽悍（ひょうかん）な魚は、花の散るように列を乱すのであった。

私はこの国の少年がみなやるように、小さな（注）尾籠（びく）を腰に結んで、幾本も結びつけた毛針を上流から下流へと、たえまなく流したりしていた。鮎はよく釣れた。小さなやつがかかっては竿（さお）の尖端（せんたん）が神経的にぴりぴり震えた。その震えが手さきまで伝わるとこんどは余りの歓（よろこ）ばしさに心が躍るのであった。

瀬はたえずざあざあーと流れて、美しい瀬波の高まりを私達（たち）釣人の目に注がす。そこへ毛針を流すと、あの小さいやつが水面にまで飛び上がって、毛針に群れるのであった。ことに日の暮れになるとよく釣れた。水の上が暮れ残った空の明かりにやっと見わけることのできるころ、私はほとんど尾籠を一杯にするまで、よく釣りあげるのであった。

川について私は一つの話をもっていた。

それは私が釣りをしに出た日は、雨つづきのあげく増水したあとであった。あの増水の時によく見るように、上流から流された汚物が一杯（注）蛇籠（じゃかご）にかかっていた。私はそこで一体の地蔵を見つけた。それは一尺ほどもある、かなり重い石の蒼（あお）く水苔（みずごけ）の生えた地蔵尊であった。私はそれを庭に運んだ。そして杏（あんず）の木の陰に、よく町はずれの路傍で見るような小石の台座をこしらえてその上に鎮座させた。

私はその台座のまわりにいろいろな草花を植えたり、花筒を作ったり、庭の果実を供えたりした。毎月二十四日の祭日を姉から教えられてから、その日は、自分の小遣いからいろいろ供物（くもつ）を買って来て供えていた。

「まあお前は信心家ね。」

姉もまた赤い布片（きれ）で衣を縫って、地蔵の肩にまきつけたり、小さな頭巾（ずきん）をつくったりして、石の頭にかぶせたりした。私はいつもこの拾って来た地蔵さんに、いろいろな事をしてあげるということが、決して悪いことでないことを知っていた。ことに、Ｂ地蔵さんは石の橋にされても人間を救うものだということをも知っていた。私はこの平凡な、石ころ同様なものの中に、何かしら疑うことのできない宗教的感覚が存在しているように信じていた。

「きっといいことがあるわ。お前のように親切にしてあげるとね。」

姉は毎日のように花をかえたり、掃除をしたりしている私を褒（ほ）めてくれていた。私はうれしかった。こうした木の陰に、自分の自由に作りあげた小さな寺院が、だんだんに日を経（と）るに従って、小屋がけが出来たり、小さな提灯（ちょうちん）がさげられたりするのは、何ともいえない、ただそれはいい心持ちであった。Ｃ何かしら自分の生涯を賭して報いられてくるような、ある予言的なるものを感じるのであった。私は毎朝、洗面してしまうと礼拝しに行った。ときとすると、あぐらをかいたお膝（ひざ）のところに大きな夜露がしっとりと玉をつづけていたりしていた。そのつぎに姉がいつもつつましげにお詣（まい）りをしに来た。

ことに夜は森厳な気がした。木の葉のささやき、空の星の光などの一切をとりまとめた感覚が、直接地蔵さんを崇拝する私の心をきわめて高く厳粛にした。私はそこで、大きくなったら偉い人になるように熱禱（ねっとう）するのであった。

不思議なことは、この地蔵さんを大切にしてからは、よく蟻（あり）などが地蔵さんのからだをはっているのを見ると、これまでとは別様な特に地蔵さんの意志を継いでいるようなものにさえ思われた。蝸牛（かたつむり）にしてもやっぱりこの神仏の気を受けているように感じた。私はだんだん地蔵さんの付近に存在する昆虫を殺すことをしなくなった。それがだんだん長じて街路でも生きものを踏むことがなく、無益に生命をとらなくなっていた。

「お前くらい変な人はない。しかしお前は別なところがある人だ。」

母も私の仕事に賛成していた。

「しばらくなら誰（だれ）でもやるものだが、あの子のように熱心にする子はない。」

私はそれらの賛嘆にかかわらず、ときとしてはこんなにしてこれが何になるとか、いますぐ自分にむくいられるとかいうことを考えなかった。私はこの小さな寺院の建立に、いろいろな器物の増してゆくところに、自分の心がだんだん離れないことを知っ

ていた。ことに私が川から拾って来たことが、母などがすぐ大工を呼んで立派なお堂を建てたらと言い出すごとに、ひどく反対させた。いまさら母の力を借りなくとも、私は私一個の力でこれを祭りたいと思っていた。私は私の神仏としてこれを庭の一隅に置きたかった。誰人(だれ)の指のふれるのをも好まなかった。

隣家に飴(あめ)屋があった。そこの米(よね)ちゃんという子は庭がなかった。私はその少年をよく庭へ入れて遊んだ。私はこの友達と磧から石を運んだり、砂を持ち込んだりした。私はだんだん大仕掛けに建てて行った。一つのものがふえれば、もっと別な神聖なものが欲しくなって来た。私は町へ出て(注)三宝や器物や花筒や燭台(しょくだい)をあがなって来た。

姉は毎日ごはんのお供物をした。私は長い庭の敷石をつたわりながら、朝のすずしい木のかげに白い湯気のあがるお供米をささげてきてくれるのを見ると、私は涙ぐみたいほどうれしく神神しくさえ感じた。

「姉さん。ありがとう。」

私はあつく感謝した。私のいろいろな仕事を見ている姉は、いつも清い美しい目をしていた。

「姉さんの目はなんて今朝はきれいなんだろう。」と心でかんじながら、私は花をかえたりしていた。

私はますますひどく一人ぼっちになった。学校へ行っていても、みんながばかのようになって見えた。「あいつらは私のような仕事をしていない。信仰をしらない。」と、みんなとは特別な世界にもっと別様な空気を吸っているもののように思っていた。先生を尊敬する心には元よりなっていなかった。(注)あのひどい生涯忘れることのできない目にあってからの私は、いつも冷然とした高慢のうちに、絶え間もない(注)忍辱(にんにく)に虐げられたあの日を目の前にして、心を砕いて勉強していた。私が成人したのちに私が受けたよりも数倍な大きい苦しみを彼らに与えてやろう。かれらの現在とはもっと上に位したすべての点に優越した勝利者になって見かえしてやろうと考えていた。

D私はあの意地のわるい学友らは、もはや私の問題ではなくなっていた。全然、あの喧嘩(けんか)や小競争(こぜりあい)がばかばかしいのみならず、その相手をしていることがもはや私に不愉快であった。

明治三十三年の夏、私は十一歳になっていた。

（注）○剽悍――すばやくて強いこと。　○尾籠――とった魚を入れておくかご。
○蛇籠――円筒状のかごに石を詰めこんだもの。河川の護岸・水流緩和などに用いる。
○三宝――神仏・貴人に物を供えるときなどに使うひのきの白木でつくった四角形の台。前と左右の三方に穴がある。一般には「三方」と書く。
○あのひどい生涯忘れることのできない目――問題文の前の場面で、私が先生から理由のない虐待を受け、怒りのあまり卒倒するに至ったこと。
○忍辱――仏教語。いろいろな侮辱・迫害を耐え忍んでうらまないこと。ここでは、そうしたはずかしめに耐えることを強いられた、というほどの意味。

問１　傍線部Ａ「若鮎はあの秋の雁のように正しく、……花の散るように列を乱すのであった。」という表現にはどんな特徴があるか。次から、最も適当なものを一つ選べ。

① 繊細な言語感覚で小動物を描くのにも雅語を多用し感性の美を強調した筆致はきわめて芸術的である。鮎の遊泳の姿の描写にも作者の美意識はよく発現している。
② 集団の中の孤独の思いは秋の雁や初夏の鮎に見入る主人公の姿に色濃く描写されている。列を乱す若鮎の動きの中にも少年の期待と不安の念は交錯して表出される。
③ 清流を整然と上る鮎の動きをその突然の乱れの姿とあわせてとらえた描写は視覚的で鮮明である。空を渡る雁などの比喩（ひゆ）も適切で印象をより深める効果をあげている。
④ 少年の日への追憶は季節の代表的な景物の描写に託されて哀切をきわめている。回顧的な筆法の中に瞬時にして次の局面への展開をはかる作者の技巧もまた優れている。
⑤ 空の雁や流れの中の鮎などの小動物に注がれる少年の愛情の描写は純真で感動的である。表面的な自然描写の奥には深い宗教的な思いが予感される筆致である。

問２　傍線部Ｂ「地蔵さんは石の橋にされても人間を救うものだ」とはどういうことか。最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　地蔵さんの仏としての本性である人間救済は、石橋にされ人間に踏みつけにされることを通じて初めて実現されるものであるということ。

②　地蔵さんの人間救済は、日々のお祈りなどの信心の深さへの応報としてのみ与えられるものであり、それは石橋にされたとしても変わりはないということ。

③　地蔵さんは石橋にされるという自己犠牲を通して、人間にそうした行為の愚かさを自覚させ、そこから人間に自己救済への道を歩ませるということ。

④　地蔵さんの慈悲は限りのないものであり、たとえ石橋として使われ、人間に踏みつけにされたとしても、人間を救済するというそのありように変わりはないということ。

⑤　地蔵さんは単に精神的側面で人間の救いになるだけではなく、その身体を石橋に化するというような実際的な形でも人間の救いになるということ。

問３　傍線部Ｃ「何かしら自分の生涯を賭して報いられてくるような、ある予言的なるものを感じる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　こうして地蔵さんを祭り崇拝し続けるならば、いつの日にか必ず報われることがあるだろうという確かな予感をおぼえている。

②　こうして地蔵さんを祭ることに生涯をかけるならば、将来きっと幸運がめぐってくるであろうという明らかな予言を聞きとっている。

③　地蔵さんを祭り崇拝しながら、こうしていればきっと恵まれた生涯を送ることができるだろうというかすかな予感をおぼえている。

④　自分の地蔵さんを祭る小さな寺院ができあがることによって、将来それが必ず報われることになるに違いないという確信を得ている。

⑤　このように地蔵さんを祭り崇拝することによって、周囲の人々から偉い人として認められることになるはずだと確信している。

問４　傍線部Ｄ「私はあの意地のわるい学友らは、もはや私の問題ではなくなっていた。」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　地蔵さんへのかかわりを通じて得られた、将来への展望を含んだ私の内面的な充実が、学友らとの間の不愉快な出来事を完全に無視できるような境地へと導いてくれたから。

②　地蔵さんへの信仰がもたらしてくれた、姉や母に対する私の親近感の深まりが、学校での学友らとの喧嘩や小競争のばかばかしさを忘れさせてくれるのに十分であったから。

③　地蔵さんへの私の信心は、命あるものへの慈愛の心をはぐくみ、他人とは異質な特別な世界を見ることを可能にし、それが学友らに対する寛容の精神を生み出していったから。

④　私の地蔵さんへのかかわりは、他のだれのためでもなく、まただれの力をも借りない私一人の営みであり、それにより得られた私の忍耐心が、学友らからの独立の境地を可能にしたから。

⑤　地蔵さんへの私の信仰は、現実的な利益を一切求めないまったく純粋なものであったが、それが結果的には周囲からの超越という思いがけない副産物を生み出してくれたから。

第八講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　室生犀星＝むろう　さいせい（一八八九〜一九六二）石川県生まれの小説家、詩人。代表的な詩集としては『愛の詩集』『抒情小曲集』がある。とくに「ふるさとは遠きにありて思ふもの、そして悲しくうたふもの」が有名。小説の代表作は『性に眼覚める頃』『幼年時代』『或る少女の死まで』など

語句

供物＝くもつ→お供え物
あがなう→二つ意味があって、一つはお金を出して購入すること（購う）、もう一つは罪を償うこと、金品等で罪の埋め合わせをすること（贖う）
冷然＝れいぜん→冷淡で心を動かさない
高慢＝こうまん→自分を優れていると思いあがって、他者を見下すこと
　類義語　傲慢＝ごうまん→おごり高ぶって、礼を欠くこと
寛容＝かんよう→心が広く、相手の言動を受け入れること。相手の過ちや失敗を厳しく責めないこと

復習問題　第八講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）庭の一グウに地蔵尊を祭る
①宮　②寓　③遇　④偶　⑤隅

（イ）荘厳な台座にチン座まします大仏
①朕　②鎮　③枕　④沈　⑤珍

（ウ）草花が庭にハン茂する
①汎　②畔　③繁　④磐　⑤煩

（エ）周囲からの賛タンに値する行為だ
①嘆　②淡　③胆　④綻　⑤担

（オ）毎週日曜に教会へ礼ハイしにいく
①輩　②俳　③拝　④排　⑤灰

次の傍線の語句の意味として最も適当なものを、次の選択肢から選びなさい。

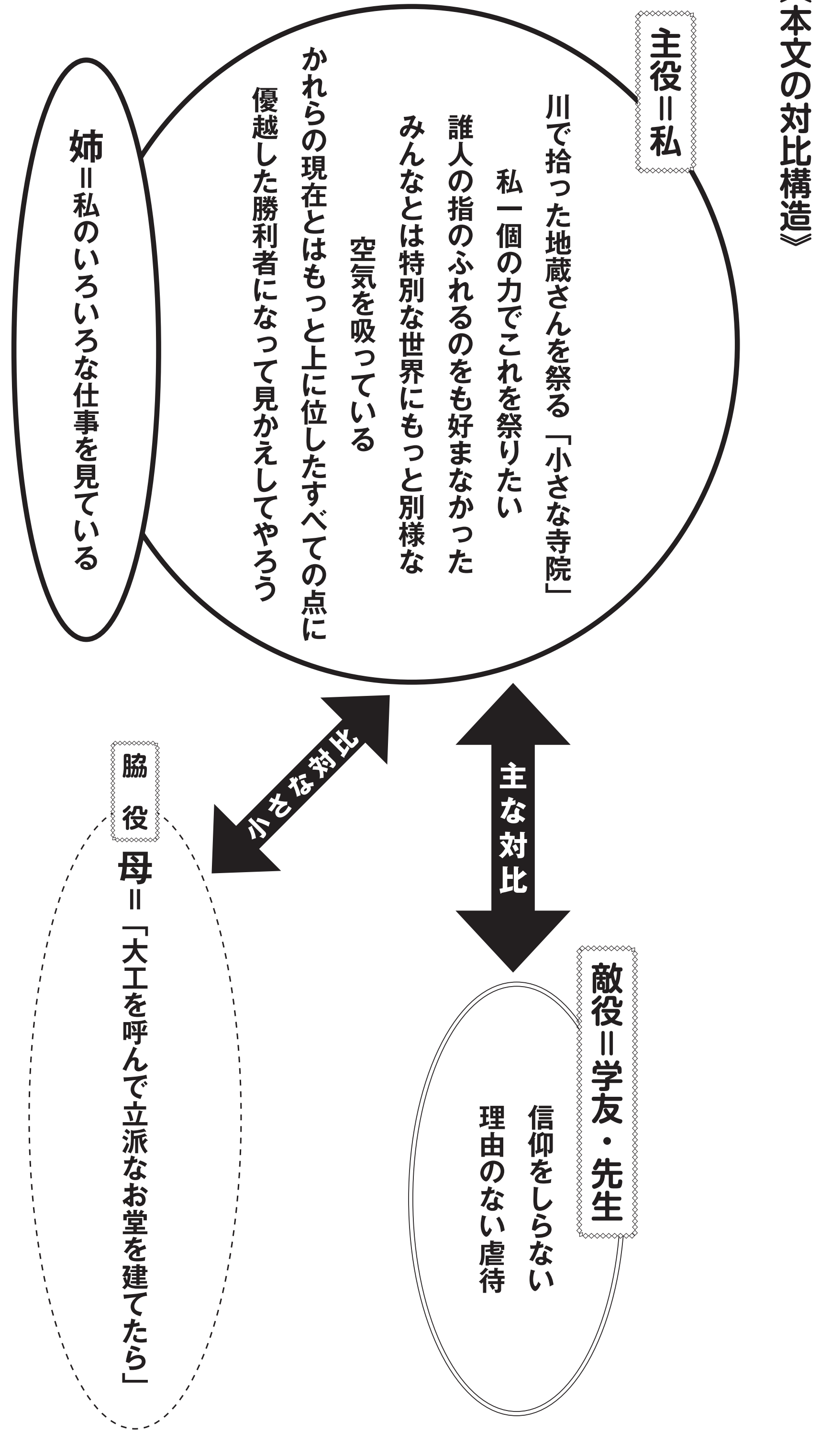
（カ）森厳な神社の参道
①おごそか　②きびしい　③静まり返った
④不気味な　⑤形だけの

（キ）紳士の高慢な態度
①声が高い　②乱暴な　③偉そうな
④折り目正しい　⑤怠惰な

（ク）家具をあがなう
①整える　②購入する　③調べる
④新調する　⑤下取りする

第八講　《小説2》　人物相互のグループ分け

《本文の対比構造》



《解説》

問１《傍線部説明》

ここで大事なのは「秋の雁」や「花」は比喩ですよ、たとえだよ、ということ。主語である「若鮎は」の説明として、「秋の雁のように〜行列をつくって」「花の散るように列を乱す」と表現しているのです。けっしてこの犀川の上空に渡り鳥が編隊を組んで飛翔しているわけではないし、犀川の土手に桜の木があって花びらを散らしているのではありません。それは比喩の誤解（比喩なのに文字通りに解釈してしまった誤り）で、②⑤がこれにあたります。例えば歩き疲れて、〝足が棒になる〟という表現がありますが、文字通りとったら〝ピノキオか！〟とツッコミたくなります。〝いやー膝が笑ってるよ〟を文字通りとったらオカルトです。膝になにか取り憑いてますよ、ってことになります。④は「瞬時にして次の局面への展開をはかる」が×です。記述に反する誤りです。傍線Ａの前も後も（しばらく後までずっと）川の話です。局面（場面）は展開（変化）していません。あくまでも若鮎の隊列が乱れた話ですね。①は「雅語」が×です。「比喩」です。けっして〝俗語・スラング〟に対して〝優雅で正しいことば使い〟をしているというわけではありません。〝チョー、ヤバイ〟みたいなくだけた表現に対し〝たいへんよろしゅうございます〟みたいな優雅さが対置されているわけではないということです。記述に反すると言っても正しい対比喪失の誤りと言ってもよいでしょう。したがって、③が正解です。

問２《傍線部説明》

この「石の橋にされても」の「も」はこんなことになって「さえも」というような**【極端な例示】**を表現するものです。あんなことやこんなこと（踏んだり蹴ったり）も含めていることを極端なケース（石橋にされる）で語っているということです。もうなにがあったって人間を救うぞという意味です。これを〝〇〇しないと人間を救ってあげないぞ〟という**【条件・限定】**でとったら正反対です。その正反対の間違いが①②です。①の「石橋にされ人間に踏みつけにされることを通じて初めて」なんていかにも**【条件・限定】**でしょ。ついでに言うと、これじゃ地蔵さんはマゾヒストだよ（踏んでくれないとイヤヨ）。②は「日々のお祈りなどの信心の深さへの応報としてのみ」となっています。これらは記述に反するとも言えますが、不当な限定と言うのが最適でしょうね。③はまず「自己犠牲」が×。正しくは「人間にひどい目にされても」ですからね。記述に反する誤りです。ま

た「人間〜の愚かさを自覚させ」などとえらく教育的な地蔵さんです。限定なしに人を救う本来の姿から大きくズレています。記述に反する誤りです。⑤は「も」を「AもBも」というような追加で取ってしまうという誤解をしでかしています。記述に反する誤りです。しかもですよ、「精神的側面〜だけではなく〜実際的な形でも」って、笑えます。〝いやー、地蔵さんのこのカタチ、このシェイプ、この首から肩へかけてのくびれのラインが石橋にツカエル！イエイ！〟ってバチアタリだよ（もちろん「実際的な形」は、実践面で、という意味で〝シェイプ〟のカタチではないけどね）。したがって④が正解です。

問３《傍線部説明》

正解は①です。根拠、判断材料は以下の言葉です。「決して悪いことでないことを知っていた」「何かしら疑うことのできない宗教的感覚が存在しているように信じていた」「きっといいことがあるわ」「こんなにしてこれが何になるとか、いますぐ自分にむくいられるとかいうことを考えなかった」。つまり、なにか具体的な応報（ごほうび）の内容まではわからないが生涯のいつかいいことがあるはず、ということです。②は「生涯をかける」が記述に反するとも、「生涯を賭して」の文脈喪失の誤りとも言えます。お地蔵さんを大切にしていれば、ひょっとしたら明日にでもいいことがあるかもしれないのです。一生かけないとダメでは厳しすぎて、本文で言われるお地蔵さんの慈悲深さの限りなさに合致しません。その点では、不当な限定とも呼べます。③の「恵まれた生涯」や⑤の「周囲の人々から偉い人として認められる」は内容限定があって不適切です。記述に反する誤りです。④は「小さな寺院ができあがることによって」が誤った限定です。お参りするだけではだめなのでしょうか。寺院が完成しないと報われないのでしょうか。お地蔵さん、心が狭いよ。というわけで不当な限定です。さらに次の点でもおかしいです。本文では「小さな寺院が、だんだんに日を経るに従って、小屋がけが出来たり、小さな提灯がさげられたりするのは、何ともいえない、ただそれはいい心持ちであった」とあります。この「従って」は時間の経過を意味しています。それを④の選択肢は「原因」と取り違えたのです（間違いの選択肢になるようにわざと）。こういうわけで記述に反する誤りとも、「従って」の文脈喪失の誤りとも呼べます。

問４《傍線部説明》

①が正解です。「完全に」は言い過ぎではないか、不当な全称判断ではないかと一瞬考えます。しかし、本文中にも「全然」という全面否定がありますから、不当ではありません。②は「姉や母に対する私の親近感の深まり」が×です。「姉」は「私」に寄り添う存在で、同一グループですが、「母」はそうではありません。大工さんなど外部の力とセットです。したがって、この選択肢は典型的な対比混乱の誤りを構成します。文章を対比で読め、グループ分けで読めということです。見方を変えると、いいですか、この選択肢を×としてつくっています。これを×として排除できる力を〝読解力〟としてカウントしているのです。この講座を通じて、入試現代文で求められている力が何か、クリアに把握してくださいね。次に③は「学友らに対する寛容の精神」がしらじらしいほどの間違いです。未来での復讐を誓っています（怖い！）。現在は無視できるというだけで、決して許していません。記述に反する誤りです。④は「忍耐心」が文脈喪失の誤りです。「忍辱」は辞書的には「忍耐心」ですが、本文ではどうか。脚注にあったように「はずかしめに耐えることを強いられた、というほどの意味」です。⑤は「現実的な利益を一切求めない」が×です。「偉い人になるように」願っていましたよ。記述に反する誤りです。なお、「一切」は、不当な全称判断ですね。

模範解答

問１＝③　問２＝④　問３＝①　問４＝①

復習問題　解答　第八講

（ア）⑤　（イ）②　（ウ）③　（エ）①　（オ）③

（カ）①　（キ）③　（ク）②

解答漢字一覧

（ア）一隅　（イ）鎮座　（ウ）繁茂　（エ）賛嘆　（オ）礼拝